東京家政学院筑波女子大学紀要第１集　113～127ページ　　1997年

＜調査報告＞

知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（１）

坂本　要

A Study of “Dainenbutsu” in the Chita Peninsula

Kaname SAKAMOTO

１．愛知県知多半島の念仏行事

・はじめに

愛知県の知多半島一帯には虫供養大念仏という行事が今でも行われている。その数は11グループになる（別表１・地図１参照）。その中でもっとも大規模に行われている大野谷の例をとると、知多市・常滑市にまたがる旧13ヶ村が年順に当番にあたり、12月から１月にかけての寒中大念仏と秋彼岸の虫供養念仏を行っている。かっては道場という仮小屋をたて18本の掛け軸の前に荘厳をほどこし、双盤鉦で和讃や念仏を村人が昼夜にわたって唱えるというものである。このグループは元和年３年（1616）の年号の入った定板（ていた）＝当番順を書いた板が残っている。別グループでこれより古い伝承を持つものもある。またこの大野谷のグループでは阿弥陀ボンサンといってこの掛け軸をもって各家の仏壇供養にまわっている在家の人がいる。阿弥陀ボンサンがいるのはこのグループだけであるが、道場をつくり掛け軸の前で大念仏を唱えるということは共通している。このような形態が民間浄土信仰の古い型が残っていると言われる由縁である。すでにこの行事については幾つかの論が展開されているが[1)]、起源や変遷については、いまだ確たるものをみない。

私が調査に入ったのは1991年の暮れの12月に大野谷の当番村であった榎戸が初めであるが、真宗村落でもないのに（大野谷の多くの地区では浄土真宗の家はこの念仏に参加していない）、念仏に親鸞作の現世利益和讃を唱えていることと、これはあとでわかったことであるが、オブクという物供米を盛る形式が真宗高田派の形式であるという不思議であった。以降このことに留意して知多半島の虫供養念仏を儀礼を中心に洗い直してみた。真宗和讃が流入した歴史的経緯については、不明な点もあるが、百万遍念仏、六斎念仏、四遍念仏などの複合についてはある程度はっきりした。以下知多半島の虫供養念仏のモノグラフに若干の考察を附して記してみた。

２．大野谷の虫供養[2)]

大野谷とは常滑市の北端にある港町大野を河口とする矢田川流域をさす。その中の知多市と常滑市にまたがる13ヶ村がこの行事に参加している。松原・羽根・北粕谷・南粕谷・大草・大興寺・矢田・久米・小倉・前山・宮山・石瀬・大野・西ノ口・榎戸の旧村であ

る。

伝承によると大野城主だった佐治家の四代目の佐治四九郎は天正年間小牧の戦にかかわり、豊臣秀吉の手によって滅ぼされてしまう[3)]。その折夫人は守り本尊の阿弥陀の掛け軸をもって逃げ、大草から大興寺を経ていずことなく立ち去った。掛け軸は大草へ一二本、残りを大興寺の稲積みへ隠していったという。それがどういうわけか、大興寺の土井伝右衛門の持ち山の松に掛けてあったという。以降土井家では戦死者の供養にこの掛け軸を拝んで戦死者の供養をしたと伝える。明治14年の「土井伝右衛門由緒書」には慶長年間前より９本の掛け軸を保持していると書かれている。

また現存の定板（ていた）には元和２年３月大草村の庄屋弥右衛門宅で13ヶ村で決めた当番の順が彫られている[4)]。13ヶ村を干支の12年に分けたもので現在までこの順は同じである。（別表２）

大野谷の虫供養の行事は三つからなりたっている。12月15日から１月16日に行われる道場大念仏、９月彼岸に行われる虫供養、年間とうしておこなわれる巡回念仏である。巡回念仏は「そとまわり」ともいわれている、阿弥陀ほんさんが各家をまわるものである。以下は1992年の榎戸が当番の時の記述である。

＜道場大念仏＞

その年の当番に当たる村は９月彼岸の虫供養の最後に前の当番村よりすべての道具を引継ぎ、12月の道場行事にそなえる。12年に一回の当番のため諸役をつとめる当人は念入りな準備が必要である。榎戸の場合、当人は10人、村には14日講、15日講、16日講、と地区ごとに講があるので、各講より３人それに、それとは別に宿元を頼んで、計10人が任にあたる。

榎戸は浄土真宗の家を除き145戸が虫供養念仏の同行として参加している。榎戸では当番年に当たる年の２月に新旧当人の交代があり、その時宿元が決まる。３月に当人の引継ぎがありここから準備が始まる。現在は公民館に道場を開設するが、昭和31年までは、辻（現在歩道橋のある地点）に藁葺きの小屋を建てて道場とした。藁は同行の全戸から集めていたが、消防法により藁小屋が建てられなくなり、農協や寺を借りたりしたが、最終的に公民館になった。藁小屋の時は８月ころから建てる準備を始めた。現在でもお盆前に道具迎えの準備を始める。

資金としては７月の麦の初穂集め、10月の秋初穂集めがあるが現在は寄付金に変えている。

道場開設の一週間前にお道具の仮並べ、お磨きが行われ、前日には前山といわれる仏花（生け花）が飾られ、荘厳の準備は整う。

まず祭壇には18幅の掛け軸が掛けられる。横並びにすべてを掛けられない道場が多いので、重なるようにして掛けている。（別表３）古いものについては煤けて画像がわからなくなっている。中央には「新幅阿弥陀」が掛けられ、その掛け軸の上端から「善の鋼」といわれる白い布が道場内部を縦断して引かれている。善の鋼はそのまま道場から外の引かれ、榎戸のむらを道沿いに一巡するように張られている。掛け軸の前の祭壇は二段になっていて、掛け軸のすぐ下はしきみ・香炉・ろうそく・オブク・供え餅・明治天皇、今上天皇位牌が置かれている。前段は前山といわれる段で曲がり松を主にした生花がかざられている。前山の両脇には灯籠が、左奥には供物がある。供物は人参・大根・白菜・蕪等の野菜に海苔、するめ、椎茸、二枚重ねの餅である。

「オブク」とは盛り飯であるが、大野谷の盛り方は、円錐型に盛る容器があってそれを

使って盛る。この「オブク」の盛り方は真宗高田派のお仏飯の盛り方と同じである[5)]。

前山の前に仕切りの低い柵が置かれるこれより奥は「内陣」といい、内陣の中を横切って通り抜けることは「霊線をきる」といって嫌われる。柵の前には双盤鉦が三張り置かれている。当人がここで念仏を唱える。この鉦のことを「しょうこ」といっている。そのうちのひとつに「元文四歳己未三月吉日　知多郡十三ヶ村念仏講中」の銘がある。元文四年は1739年である。

12月15日は道場入りといって、入仏式が午後より行われる。宿元の挨拶のあと三人の当人の鉦を音度に経文・念仏・和讃が唱えられる。経文の間々に掛け軸への賛嘆が入るが、その折々に宿元が読み上げられた掛け軸に線香をあげる。南無阿弥陀仏の念仏が唱えられるたびに全員が一礼する。和讃は親鸞上人作の現世利益和讃の全文で、十五首よりなるので十五首和讃ともいう。この法要は一時間ほどで終わる。12月15日の道場開催中は毎日朝勤行を６時から夕勤行を７時から行う。行う内容は入仏式と同じである。また同行の13ヶ村が日を決めて道場詣りに来るのでその接待をする。また期間中は御詠歌講・カラオケ大会など様々な演芸が催される。（別表４）

経文・念仏・和讃の構成は次のようである。

○弥陀尊勤行式

1　念仏五唱　2　香偈　3　懺悔文
4　三宝礼　5　四奉請　6　開経偈
7　般若心経　8　発願文　9　照益文
10　掛け軸賛嘆
　一尊の阿弥陀如来様
　三尊の阿弥陀如来様へ回向し奉る
　　念仏一会
　大日如来様
　来迎願王阿弥陀如来様へ回向し奉る
　　念仏一会
　古仏十三仏如来様
　新仏十三仏如来様へ回向し奉る
　　念仏一会
　南無観音菩薩様
　地蔵大菩薩様
　諸仏諸菩薩様へ回向し奉る
　　念仏一会
　弘法大師六字御名号様
　祐天上人の御名号へ回向し奉る
　　念仏一会
11　現世利益和讃（十五首和讃）→（別表５）
　　念仏三唱
12　別回向
　今上天皇陛下寶祈延長聖化無窮玉体安全を祈り
　　念仏一会
　日本国大小神祇帝室歴代尊儀明治大帝尊儀増崇品位
　　念仏一会
　家内安全等諸祈願
　　念仏三唱
13　四弘誓願　14　一礼三拝　15　送仏偈
16　念仏六唱

＜おためし＞

道場供養も終わりの14日の夜、日課の夕念仏が終わってから、おためしという粥占いが催される。道場内の鉦の並びに炊飯用の釜を置き、粥を煮立て、その中に篠竹をたてに割って糸で縛りなおしたものをいれて、しばらくして取り出し糸を解いて篠竹の中に粥が何粒入るかでその年の作物の豊凶を占う。これを行うのは後述の阿弥陀ぼんさんで、釜の前で印を結び諸神諸仏に祈願ののち、般若心経の功徳をのべて、粥の煮えるまで何回となく、鉦をたたいて般若心経を繰り返し唱える。占う作物は稲（早稲・中稲・晩稲別）大麦・小麦・綿・大豆・小豆・海苔・蜜柑・甘藷・馬鈴薯・玉ねぎとここで採れる作物・海藻である。粥の入り具合によって大中小に作柄の予

想が報告される。このあと甘酒がふるまわれて終わりになる。かっては翌15日の午前中に大興寺の土井家へお礼参りにいったのだが、近年では15日が祭日のため、この行事は16日に行われるようになった。土井家へ参るのはこの掛け軸が土井家の祖、土井伝右衛門により発見された故事による。

＜虫供養大法要＞

かっては九月彼岸の入りの日に行ったが、現在では彼岸の中日に近い日曜に行っている。道場の中は正月同様に掛け軸を掛け、荘厳で飾るが、道場の外には虫供養の角柱を立て、そこで供養の念仏をする。かっては生木に供養文を書いたというが、現在は僧侶に書いてもらう。供養文は次のとおりである。

光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨
奉修蟲供養耕地害虫蠢々含識抜苦與楽超生
浄土寶塔
天下和順日月清明風雨以時災疫不起国富民
安兵戈無用崇徳興仁無修禮讓
維時平成四年九月仏日大野谷虫供養壬申榎
戸念仏講建之

10時より塔婆供養阿弥陀ぼんさんと当人が集まり、供養塔の前に伏せ鉦で経文を唱える。いつもであると阿弥陀ぼんさんの清水さんが香偈　般若心経　送仏偈を唱えていたが、おしくもその年に亡くなられたので、当人が変わりを勤めた。午後は13ヶ村から参詣に訪れた人をまじえて、お別れ念仏を唱える。日課の弥陀尊勤行式を行う。その後掛け軸荘厳をかたづけ次の当番村に引き渡すようにする。

引き渡しは夕方になってしまう。まずお宝が引き渡される。お宝とは、元和２年に書かれた定板（ていた）と初穂料として米を集めた枡、これは一升と五合のものといわれている。さらに虫供養の書かれた由緒書きの三点で風呂敷に包んで渡す。当人以外は見てはならないとされている。道場では板に書かれた道具の目録にあわせてひとつひとつ確認して手渡される。その品目数は50点を越える。供養迎えにきた次の当番はお宝の包を先頭にお囃しに併せて見送られる。かっては一点一点かついで長い行列を作って運んだというが、現在ではトラックに乗せてはこぶ。これで一年におよんだ虫供養の念仏は終わる。

＜阿弥陀ぼんさん＞

大野谷には道場で行う虫供養とは別に阿弥陀講とか巡回供養といって阿弥陀ぼんさんという在家の人がほぼ一年を掛けて村々を歩き各家の仏壇の供養をする。１月の17日に道場供養が終わり土井家に届けられた掛け軸は翌18日より各家をまわる。まわる順は（別表６）の順で、これも元和２年の定板に虫供養の順を決めた時に決めたといわれる。大草の庄屋で決めたとなっているところから大草の巡回の日取りが多い。また大野は有力者の家しかまわっていない。また虫供養同様に抽選で決めたらしく地理的にはとびとびの順になっている。昭和56年に話し合って新しい巡回にした。割り当てられた村の巡回はさらに村の中の順にしたがって各家をまわるので、例えば榎戸では11日講としてこの巡回を受けているが、毎月一軒、年12軒の家を廻る。阿弥陀ぼんさんは虫供養に参加している家から頼まれてなるが、一年の大半をこの役に費やしてしまうので、大変であった。平成４年まで役を引き受けて亡くなった清水恒明さん（明治43年生）は昭和57年から10年勤めたのは、最も長い例であった[6)]。

巡回は朝に前の家に掛け軸を受取りにいき、仏車というリヤカーに掛け軸や仏器をつんで次の村の家に向かう。以前は背負ったと伝えるが現在あとを継いだ桑山百次さんは自動車でまわっている。着くと掛け軸の中から新仏といわれる五本を選んで阿弥陀の掛け軸を中心にして家の中の北面に掛ける（別表３

参照）

阿弥陀ぼんさんはそこで掛け軸に般若心経を拝んで帰る。夜その家のものは改めて法要をする。唱えるのは主に現世利益和讃である。現在桑山さんは懺悔文・般若心経に因果和讃（白隠和尚作）を読んでいる。

注

1）津田豊彦「知多半島虫供養ノート」『名古屋民俗』17・1980
江端祥弌『大野谷虫供養』1971
江端祥弌『大野谷虫供養南粕谷道場』1985
小川知美「知多の民衆信仰」『福祉大学評論』34　1984
鈴木泰山「尾州知多郡阿久比谷の虫供養について」『愛知大学総合郷土研究所紀要』9　1963

2）大野谷の虫供養については以下の文献に史料もふくめて詳しく記載されているので、ここでの記述は儀礼を中心とした。
伊奈森太郎『尾張の祭』1967　名古屋鉄道株式会社
津田豊彦「知多半島虫供養ノート」『名古屋民俗』17・1980
江端祥弌『大野谷虫供養』1971
江端祥弌『大野谷虫供養南粕谷道場』1985
知多市役所『知多市誌　史料編三』1983
常滑市役所史編纂室『常滑市誌　文化財編』1983

3）佐治家のこの伝承については伊奈森太郎『尾張の祭』に詳しい。佐治家の滅亡の年にはいくつかの説があるが、江端祥弌『大野谷虫供養』1971に「「土井伝右衛門由緒書」にみる一色、佐治時代」に天文元年（1532）・天正８、９年（1581、82）等の諸説がのっている。

4）伊奈森太郎は前提書でこの定板に書いたのは、これ以前に各村で掛け軸を掛け、賽銭をとることがあり、その権利の奪い合いがあったのでこのような処置をとるようになった。また初穂米を集める枡もこの時以来宝物として受け継ぐようになったとしている。順番は抽選でおこなったためか、地理的に隣接していない。

5）『真宗大辞典』＜1936　鹿野苑＞の「仏飯」の項に次のようにある。「仏飯を盛るのに甲乙二種の形式がありて、甲は円錐型にもりて未敷蓮華に擬す。これを蓮莟形（れんがんぎょう）と名つけ或いは捏（つくね）仏供という。乙は円筒形の器を用いて飯を突き出し蓮実に象る。これを蓮実形と称し、或いは突き仏供と称す。本願寺派・高田派等は甲形を用い、大谷派は乙形を用いる。」

写真３は福井県大野郡和泉村上大納の報恩講の時の仏飯の盛り方である。この地区では古くから大谷派と高田派が混在している所で、村の道場の仏前に供えるものである。奥にあるのが大谷派の盛り方で、円筒形になっている。手前が高田派の家の盛り方で円錐形になっている。

現行では、大谷派は円筒形で盛槽（もっそう）という道具を使う。本願寺派は、蓮莟形といって、丸く盛る。高田派は同じ蓮莟形でも円錐形のとがった盛り方をする。

6）清水恒明さんは大野町の船大工であったが、奥さんが寺の家であったこともあって、修業のためといってこの役を引き受けた。毎朝７時に自転車ででかけていき、自転車で仏車を次の村まで引いて、次の家で供養して昼過ぎに帰って来る毎日であった。

桑山百次さんは平成４年、清水さんが亡くなったあとこの役を継いだ。家は金山で石瀬の組に入っている。父親は鍛冶屋であったが、仕事で失明し、信仰心の厚い母親が家計を保った。母親が大野の真宗寺光明寺によくお詣りにいったため、自然と経文を覚えるようになり、信心家といわれるようになった。今回もまわりから押されてこの役を引き受けたという。現在14日に大野15日に土井家として半月をこの役にさいている。

地図１　知多半島周辺図

（別表１）

①	大野谷虫供養	知多市・常滑市13ヶ村	９月彼岸虫供養・道場大念仏
②	日長・岡田小供養	知多市５ヵ村	正月虫供養
③	西浦14ヶ村（現３ヵ村）	東海市・知多市	９月彼岸
④	富木島宝珠寺（東海市）	みださん	春秋彼岸
⑤	東浦（緒方）５ヵ村	東浦町	９月彼岸
⑥	阿久比虫供養	阿久比13ヶ村	９月彼岸・寒干し・土用干し
⑦	乙川海蔵寺虫供養	半田市（四遍念仏）	９月彼岸
⑧	成岩常楽寺	半田市（四遍念仏）	９月彼岸
⑨	枳豆志５ヵ村	武豊町・美浜町	９月彼岸――大峯講
⑩	西枳豆志５ヵ村	常滑市（六佐念仏）	
⑪	名和薬師寺みださん	東海市	１月８日・土用干し

地図２　大野谷地図（『知多市誌　資料編三』より作成）

（別表２）干支と年番

子年	北粕谷	丑年	矢田	寅年	大興寺	卯年	西之口
辰年	松原	巳年	南粕谷	午年	小倉	未年	宮山・石瀬
申年	榎戸	酉年	大野権現	戌年	大草	亥年	羽根

（別表３）榎戸の場合の掛け軸

（向かって右より）

1	六字名号（大僧正）		
2	釈迦浄土（十大弟子）		
3	延命地蔵菩薩		
4	大日如来		
5	来迎願王（阿弥陀来迎図）		
6	地蔵菩薩	判別不能	巡回念仏
7	古仏十三仏	判別不能	
8	大日如来	判別不能	巡回念仏
9	弘法大師六字名号		
10	新幅阿弥陀		中央掛け軸（善の綱）
11	阿弥陀一尊	判別不能	
12	阿弥陀三尊	判別不能	
13	聖観音菩薩	判別不能	巡回念仏
14	新十三仏	判別不能	
15	祐天上人六字名号	判別不能	巡回念仏
16	来迎願王（阿弥陀来迎図）		巡回念仏
17	聖観音菩薩		
18	六字名号（増上寺）		

（別表４）

（別表５）現世利益和讃（十五首和讃）

阿弥陀如来化して	息災延命の為にとて
金光明の寿量品	説きおき給へるみのりなり
山家の伝教大師は	国土の人民をあわれみて
七難消滅の誦文には	南無阿弥陀仏をとなふべし
一切の功徳にすぐれたる	南無阿弥陀仏をとなふれば
三世の重障みなながら	必ず転じて軽微なり
南無阿弥陀仏をとなふれば	この世の利益はきわもなし
流転輪廻の罪消へて	定業中夭のぞこりぬ
南無阿弥陀仏をとなふれば	梵王帝釈帰敬す
諸天善神ことごとく	夜ひる常に守るなり
南無阿弥陀仏をとなふれば	四天王もろともに
よるひる常に守りつつ	萬の悪鬼を近づけず
南無阿弥陀仏をとなふれば	堅牢地祇は尊敬す
影と形の如くにて	よるひる常に守るなり
南無阿弥陀仏をとなふれば	難陀跋難大龍等
無量の龍神尊敬し	よるひる常に守るなり
南無阿弥陀仏を唱ふれば	閻魔法王尊敬す
五道の冥官みなともに	夜昼常に守るなり
南無阿弥陀仏をとなふれば	他化天の大魔王
釈迦牟尼のみまえにて	守らんとこそ誓ひしか
天神地祇はことごとくく	善鬼神とはなづけたり
これらの善神みなともに	念仏の人を守るなり
願力不思議の信心は	大菩提心なりければ
天地に満る悪鬼神	皆悉くおそるなり
南無阿弥陀仏をとなふれば	観音勢至はもろともに
恒沙塵数の菩薩と	影の如く身にそへり
無碍光仏のひかりには	無数の阿弥陀ましまして
化仏各々ことごとく	真実信心を守るなり
南無阿弥陀仏をとなふれば	十方無量の諸仏は
百重千重囲繞して	喜び守り給ふなり

（榎戸念仏講教本より）

（別表６）巡回供養の日程（江端祥弍『大野谷虫供養』より）

地　区　名	各月の日	地 区 名	各月の日
南　粕　谷	1.13.30	大　　草	１月17.18.19　　２月16.17.18.19
西　之　口	2.26		３月16.17.19　　４月16.17
小　　倉	3. 4.22		５月16.17　　６月16.17
羽　　根	5.14.29		７月16.17.19　　８月16.17.18.19
松原 上松原	6		９月16.17.19　　10月16.17.20
松原 下松原	10		11月16.17.19
北　粕　谷	7. 8.11		１月大野20.　　２月　池田屋20
大　興　寺	9.15	大　　野	３月綿六19.　大野20
矢田 矢　田	12.28	権現以外	４月おかめすし18.　村田屋19
矢田 矢田坂	27		山口仁右エ門20
権現（大野）	21		５月田島屋18.　善九19.　大野20
石　　瀬	23		６月高津16.　藤沢屋20
宮　　山	24		７月姫路屋18.　大野20
榎　　戸	25		８月山一20
			９月加賀屋18.　大野20
			10月油金18.　丹羽屋19
			11月丸由18.　角田20

昭和56年４月１日より

１日　大　草、２日　上・下松原
３日　羽　根、４日　北粕谷、５日　大興寺、
６日　矢　田、７日　南粕谷、８日　小　倉、
９日　石　瀬、10日　宮　山、11日　榎　戸、
12日　西ノ口（小林）、13日　権　現、
18. 19. 20日　権現以外の大野、
14. 15. 16. 17. 21～31日は清水氏宅供養

写真１　道場の掛け軸と荘厳

写真２　オブク

写真３　（参考）オブク――仏飯＜福井県大野郡和泉村上大納＞注５参照

写真４　１月14日の阿弥陀ぼんさんによる「おためし」
写真は故清水恒明氏（1993年撮影）

写真５　９月彼岸　虫供養塔前の念仏

写真６　引き渡しの道具詰め

写真７　阿弥陀ぼんさんの引いた仏車

写真８　矢田で建てられた道場小屋（1996年12月撮影）